

郷土文学資料センター だより

第10号 2007年 11月 8日

句 会

吉田 紗美子

下関で羅災して徳山に歸郷した兼崎地橙孫は、そのころ、三百頁におよぶ俳句評論『清明の道』を稿了したばかりであった。そこで地元の俳句グループの句会に参加する。その会は「ホトギス」系の会なので、地橙孫はいわばお客様待遇であった。

その日の会場は地橙孫宅で、「舞車庵」と河東碧梧桐揮毫の横額のかかっている座敷に、十人余のメンバーが集まつた。若い人(といつても四十代)が多いせいか、ことに賑やかである。席題はなにだったか、〆切ったとき、地橙孫の句のなかに

物の芽や 埃に遊べる雞雀

そんな一句があつた。

老大家への敬意からか、若い人がこの陳腐な句を「春の農家の庭先の風景がよく表現されていると思います」と、感想を述べた。二三の同意もあつた。すると、それを聞いた地橙孫は煙草を消し、すっと背筋を伸した。

「これは、そんな風景を詠んだのではありません。俳句らしきものの芽生えある処で、諸公が、ある流派の境内でたのしく遊んでいる光景を詠んだもの、です」

そういって地橙孫はいつもの温顔に優しい微笑をたたえ、皆を眺めた。

皆は呆然とした。一瞬、二瞬…そして三瞬までも沈黙があつて、突然、才氣煥発の女流の華やかな笑い声がひびいた、「あら、まあ、兼崎先生、相変わらずお口の悪い。隨分と辛辣でいらっしゃいますこと」。

その言葉に、硬張っていた皆の表情がようやく弛んでいった。

散会後、皆を玄関に見送った母は座敷にもどってくるなり、

地橙孫を嗜めた、「いくらなんでも、あれはやりすぎじゃありませんか」。

「そうかナ」と地橙孫は首をかしげ、「ああ言われても誰一人私に食つてかかる者がいない、その方がよほど不思議じやないか」

「皆さん紳士淑女ですからね、噛みつくようなはしたない真似はしませんよ」

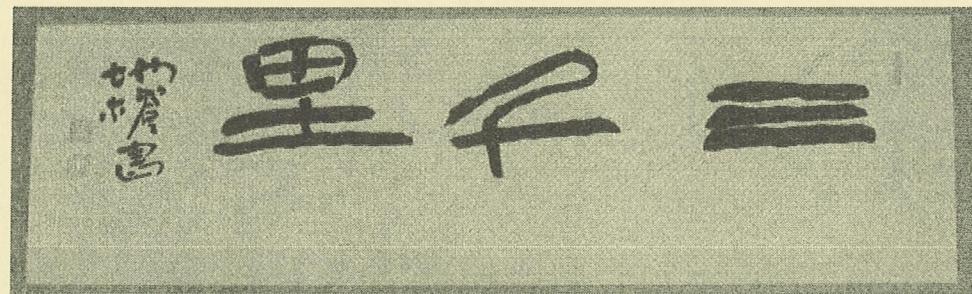
「ふうん」と書斎へ歩いてゆきながら、地橙孫はいった。

「句会は、社交の場かね」

机の前の回転椅子に坐つていると、地橙孫の脳裡に、冬の夜の小さな句会の記憶が甦えてきた。

全国行脚中の碧梧桐は眼光鋭く、陽灼けして精悍にみえた。床柱に凭れて仮眠していたが、「先生、〆切ですよ」とゆり起こされると、すぐさま筆をとつて皆の見守るなか、立て続けに書いていった、その速さ、集中力の凄さ、そして十句ばかり認めるに、もう詩想は出し尽くしたというような潔さで筆を描いた。下関の旅館「網市」の電燈は暗く、畳も赤茶けていたが、その粗末な部屋に、気付くと緊迫した、白刃のやりとりのような気迫が充満していて、「これが、句会というものか」とはじめて出席した地橙孫を圧倒した。

あれが俳句開眼だった。あの句会で碧梧桐と出会わなかつたら、おそらく専門俳人としての現在はなかつただろう…と、地橙孫はかすかに夕焼けしている空を見上げた。



地橙孫の扁額（吉田紗美子氏より寄贈）

山口県の自由律俳句史

田村悌夫

(当センター協力員)

山頭火を筆頭とする山口県は、大正時代は自由律俳句のメッカであった。荻原井泉水は種田山頭火、久保白船、江良碧松の三人を「層雲」の周防三羽ガラス」と呼び、度々来県している。

自由律俳句の歴史は、近代俳句を提唱した正岡子規の弟子の河東碧梧桐の新傾向俳句から始まると言える。碧梧桐は子規の定型俳句に対し、自由に感情を表現する十七音にしばられない俳句を主張し「新傾向俳句」と命名した。碧梧桐の俳句の後輩であった井泉水は、これをさらに進め季語無用論を唱え、碧梧桐とたもとを分かち「自由律俳句」への道に進み『層雲』を主宰する。

山口県で一番最初に新傾向俳句に手をそめたのは、徳山出身の兼崎地橙孫である。地橙孫は明治40年(1907)頃から碧梧桐が選者の雑誌『日本及日本人』の俳句欄に投句しており、明治43年(1910)、第2次全国遍歴の途にあった碧梧桐と門司から下関市阿弥陀寺町の旅館「網市」の句会に行き始めて会い、以来碧門となる。五高へ入学後、地橙孫は熊本で『白川及新市街』を主宰。

大正4年(1915)、碧梧桐は中塚一碧樓と『海紅』を立ち上げるが、地橙孫もこれに参加する。この『海紅』に県内から参加したのが熊毛三丘の河村蟻介である。蟻介は大正3年(1914)俳誌『樹』を創刊。これに熊本から地橙孫が投句しており、同じ投句仲間であった山頭火は『樹』を通じて地橙孫を知り、大正5年(1916)酒造業破産後、彼を頼りに熊本へ妻子を連れ落ちのびた。

荻原井泉水が明治44年(1911)に自由律俳句『層雲』を創刊したとき、同人として参加したのが平生佐合島の久保白船である。後に子女教育のため徳山に来て「雑草の会」主宰。この会に旅の途中の山頭火が出席していた。山頭火とは旧制山口中学以来の付き合いであった。

『層雲』創刊と同じ44年に田布施麻郷の江良碧松は、友人3人と自由律俳句の会「一夜会」をはじめ、翌45年(1912)から『層雲』に投句開始。一夜会には防府の浴永不泣子も出席した。

山頭火は同じく44年に三田尻の弥生吟社・椋鳥句会に参加したのがはじまり。この会は定型とか自由律とか区別せず詩歌も入った会で、椋鳥会五句集(回覧雑誌)を出していた。八代の亘理寒太はこの回覧雑誌に投稿していた。山頭火の『層雲』への投句は大正2年(1913)からである。

大正3年荻原井泉水を田布施に迎え、平木屋旅館で層雲山口県周東大会が開催されている。

この他に岩国に松金指月堂、柳井に藤田文友、光に大前誠二、徳山に河村漣月、富田に青木健作、山口に鈴木周二、阿東に渡辺砂吐流、下関に近木圭之介、小郡に国森樹明、伊東敬二、下岡冬村、河内山草歩らがいて、大正から昭和初期にかけ山口県の自由律俳句は全盛時代であった。

阿東町の文学風土 —静謐の作家斯波四郎と芥川賞の世界—

野 口 義 廣

(当センター研究員)

今年7月16日阿東町で第43回の文学講座が開催された。その折筆者は副題のタイトルで初めての話をした。斯波四郎(本名・柴田四郎, 1910-1989)は阿武郡阿東町生まれの作家である。昭和34年(1959)「山塔(さんとう)」により第41回の芥川賞を受賞。そんな彼に少し心動かされたのは本人また夫人のこれまで居住の地の多くが小生とも関係の深い場所だったからである。そしてさらにはそれらの地に対する新たな発見や出会いが期待されたからでもあった。

3月の東京出張では夫人にお目にかかり、また隣りの奥様にもお話を伺うことが出来た。それらが御縁となって6月夫人より近刊の歌集『庚申薔薇』をいただいた。夫人は作歌歴六十余年のアララギの有力歌人。同誌終刊後『青南』の編集者また選者として御活躍。

出張後、早速調査結果を町教委に報告。するとそのような内容でよいから話してくれないかとのこと。いくらなんでもその程度でお茶を濁すわけにはいかない。これまでの講演はいずれも年季が入っている。今回は期日までに三ヶ月しかない。全く無謀であった。この認識の相違が想わぬ問題を露呈することになった。単なる講演ではないのだ。これまで町民また県民にまったく忘れられていた町出身の文学者を町外の者が“顕彰”しようという試み。しかも“義挙”なのだ。したがって当然町の側にもそのような動きがあるのだと思っていた。ところが依頼の文書は“文学講座”となっていた。再来年は生誕100年。今回の動きはそれに向けてのものと思われたが関係者は誰もそのことを認識していなかった。知っていたなら三ヶ月前に依頼などということはなかったであろう。しかしながら、たっての願いでどうどう引き受けことになってしまった。

それからはこの日に向けての苦しい日々が続いた。なかなか行く手に明りが見えて来ず、自分を納得させるため再度阿東町に足を運んだ。考えれば考えるほど深まる疑問。そしてその解決に向けての思索と調査にぎりぎりまで悪戦苦闘。大学時代近代文学関係の講義が面白くなくて身を入れて聞かなかつたツケがどつと出てきたのだ。おまけに受賞作以外の作品が入手困難。聴衆が作品を全く読んでいないということを前提に話さなければならない。というわけで、多少なりとも納得のいく資料が出来上がったのは日付も変わった深夜一時過ぎであった。たった一時間半の講演なのに膨大な資料を準備。それは全体像が見えないことには部分も論じられないからだ。

最初に地元のビデオ作家の作品の上映があったが、シナリオは小生のそれではない。それを観ることにより話の筋が変わるであろうことは十分予想された。そして結果大幅な変更を余儀なくされた。とは言え、これまで一度も話したことのない内容。筋立て変更もなにもあったものではなかった。

当日は雨天にもかかわらず100余名の町民が訪れた。数の上では大盛況であったが、町長を始めとする三役や議員諸氏の姿は全くなかった。一方県外からは北九州市で高校の国語教員をしている防府出身の大学の先輩がわざわざ駆けつけて下さった。

こうして、“にわか研究者”的初めての講演はあっけなく終わった。話しもらしたこと多々あったが、まずは地元の方々に斯波四郎という作家の存在を知っていただくという所期の目的は達成された。あとは町民が自らの問題としてどう受けとめるかである。再来年の生誕100年に向けての動きは既に始まっているのだ。

寄贈図書・雑誌

第9号の編集後記にも記したことですが、山口県関係の図書・雑誌が総計一万点を越え、その後も引き続き多くの貴重な資料をお寄せいただいております。この度は宇部にお住まいの佐野千鶴子様、また豊北町の伊藤忠芳様から多数ご寄贈いただきました。

今回はスペースの都合によりご紹介できませんが改めましてご紹介させて頂くつもりです。それ以外の寄贈図書・雑誌は以下のとおりです。(平成19年4月～11月まで)

■著書

河村正浩『句集 鳴呼回天』東京四季出版, 2007年

日本河川協会『河川文化 河川文化を語る会講演集23』(2冊)日本河川協会, 2007年

浜崎勢津子『美枝の出産』2007年

防府市立防府図書館『平成18年度図書館年報』2007年

三牧義明『句集妻のしやばん玉』東京四季出版, 2007年

■雑誌』

『ひとごこち山口』 3

『自由律俳句「群妙」』1 / 『飄』75,76 / 『其桃』748-754 / 『萌』347-352

『ほうふ図書館だより』220-227 / 『防府市立防府図書館・図書館年報2006』

『文芸山口』272-275 / 『季刊ふるさと紀行』109-111

『みねぶんか』38 / 『風響樹』35

『郷土資料新着ニュース』35 / 『火山群』46

『中原中也記念館報2007』 / 『中原中也研究』12 / 『柳井短歌』261

展示案内 一

「檜崎 勤」関係資料

期間 2007年10月25日(木)～11月21日(水)

場所 山口県立大学 3号館 1階 郷土文学資料センター

開室時間 10時～16時(平日)

◆編集後記 ▼兼崎地橙孫の貴重な資料が当センターに寄贈されたのを機に、地橙孫のご長女であられる吉田紗美子様・当センター協力員の田村悌夫氏のお二方にお願いして俳人

地橙孫に関する原稿をお寄せ頂きました。厚く感謝申し上げます。

▼本誌ならびに当センターへのお問い合わせ・ご要望・ご意見等お有りでしたらご遠慮無く下記宛ご連絡下さいますように。

◆編集発行 山口県立大学附属郷土文学資料センター(〒753-8502 山口市桜島3-2-1)